

+ 3 8 【ごろざえもん】

こどものころから現在まで、ぼくが好きな武将は、太田道灌、直江兼続、真田幸村ですが、いくら待ち望んでも、【どうかん】とか【かねつぐ】とか【ゆきむら】とかのおぼけはでてくれませんでした。

けれども、武将のおぼけはでたことがあります。

自称【ごろざえもん】です。

このおぼけを思いだすと、何とか再会できないものかと、毎度念じたものですが、一期一会（いちごいちえ）におわっています。

秋の日曜日のある朝、隣のお姉さんがやってきて、中山の古塚（ふるづか）に行きたいのだけれども、ぼくに一緒に行ってくれないかという。

本当はお姉さんとなら地獄（じごく）の果てまで行ってもかまわないのですが、てれくさいので遠慮（えんりょ）していました。

すると何度も頼まれ、お昼のおにぎりまで用意してあるといいます。

ぼくはおにぎりにつられたふりをして、もしかするとふりではなく、首を縦（たて）にふりました。

道々、どうして古塚まで行くのかと尋ねると、

「ご先祖さまがあそこに眠っているのです」

と答えました。

御影石（みかげいし）で作られた古塚には、鬼が眠っていると噂されていたので、そう尋ねると、

「ご先祖さまは鬼とよばれた武将だったのです」

と答えました。

「ぶしょうたあ、さなだゆきむら、みたいなひとかのう」

「真田幸村ほど有名でも偉くありませんが、幸村くらい強くて立派な武将でした」

「もしかして、どうかん、かのう。かねつぐ、かのう」

「いいえ、山本五郎左衛門（やまもとごろざえもん）といいます」

「ならば、おねえさんも、やまもとさんかい」

「あら、金ちゃんは私の名前をごぞんじなかったのですか。山本不二子といいます。下手な詩人をやっています」

「しじんたあ、はつみみじゃのう」

「ええ。金ちゃんにいうのが初めてですから」

お姉さんの下手な詩を教えてもらいたかったのですが、下手な詩を教
えてもらってもしかたがないとおもったので、その強くて立派な武将の
ことを尋ねると、お姉さんは詳しく教えてくれました。

それをかいつまんで記します。

山本五郎左衛門は、真田幸村より少し前の、戦国時代（せんごくじだ
い）の武将。

大昔この村を治めていた小さな豪族（ごうぞく）で、家来が三百人し
かないから、周りの大きな豪族から、しょっちゅう攻められていまし
た。

けれども（剣も槍も弓も達人である）山本五郎左衛門があまりに強い
ので、いくら攻めてもこの地は奪われることがなかったのです。

ところがある年に、周りの大きな豪族が組んで、総勢三万の大軍で攻
めてきました。

そこで山本五郎左衛門とその家来たちは、砦（とりで）に籠城（ろう
じょう）して、敵を迎え討ったのです。

なんと攻防（こうぼう）半年に及び、いよいよ食料も水もなくなり、
味方も十分の一になっていました。

それでも山本五郎左衛門は、なんとかこの地を敵に渡してなるものか
と、思念（しねん）しました。

そこで、敵が押し寄せてきた最後の決戦のときに、砦の一番高い櫓（や
ぐら）に登り、己の腹をかつさばいて、己の腹のなかの胃だの肝臓だの
大腸だの小腸だのを次から次ぎへと、向かってくる敵に投げつけたので
す。

それでも山本五郎左衛門は倒れることなく、敵を罵倒（ばとう）した
ものですから、敵はひどく気味悪がって全軍退却しました。

それ以来、この地には鬼がいるというので、敵が押し寄せてくること
は一度もなかったそうです。

その砦跡が中山であり、櫓の場所に山本五郎左衛門の墓ができたので
す。

天変地異（てんぺんちい）で墓は消え去りましたが、江戸時代になって、山本五郎左衛門を偲ぶ、古老たちによって、石塚が作られたわけです。

江戸末期までは山本五郎左衛門はこの地の英雄でしたが、明治の御代になってこの地に「英雄禁止令」が発令されて、山本五郎左衛門の名は次第に忘れ去られたということです。

さて、二時間ほど歩いて、古塚につきました。

お姉さんは途中で摘んできた野菊を供え、ぼくはぼくの分のおにぎりを一個供えました。

そのとき、まだ昼間だというのに、いままで皓々と太陽が照っていたというのに、一天にわかにかき曇り、冷え冷えとした風が吹いてきました。

「おねえさん、さむうないかのう」

「私は大丈夫。金ちゃんこそ薄着ですね」

「わしはふゆでも、はだかでいきとる」

強がりをいいましたが、黒雲の間から巨大な人物が舞い降りてきたときには、呆気にとられました。

その人物は鎧兜（よろいかぶと）に身をかためて、腰に剣、槍を手にしています。

ぼくはその男らしい勇姿（ゆうし）にみとれ、お姉さんは身をかがめています。

「おまえさまは、もしかして、あのその、おねえさんのごせんぞさまでござりまするか」

ぼくが勇気をふるって尋ねると、

「山本五郎左衛門推参（すいさん）なり。いまでは【ごろざえもん】というおばけなり」

「すごいでござる。りっぱでござる。あいたかったでござる」

ぼくが感激していると、【ごろざえもん】はおねえさんを見つめ、

「よう来てくれたな、不二子よ。拙者もそなたに会いたかったぞ」

「はい、ご先祖さま。私も光栄でございます」

言葉とは裏腹に、お姉さんはまだ身をかがめ震えている。

ぼくはお姉さんの肩を抱いて、
「おねえさんは、てきじゃのうて、みかただし、しそんなんじゃから、
こわがることないがのう」
ぼくが諭（さと）してもだめです。
「ご先祖さま。どうか成仏（じょうぶつ）してくださいませ。世間はご
先祖さまを忘れ去っても、私は決して忘れませんから」
お姉さんは震える泪声でいいました。
「拙者の姿を見ないで、忘れるも忘れないもなかろう」
【ごろざえもん】は納得していません。
その声の高く大きいことといたらありません、村じゅうにきこえそ
うなほどでした。
「本物の武将を見たことがありませんし、しかもご先祖さまですから、
恐れ多くてとても見られません」
お姉さんもうまいことをいったものです。
さすがは詩人です。
「なるほどのう。されど不二子は拙者を見られなくとも、拙者は不二子
の顔をよっく見たいものであるぞ」
【ごろざえもん】の心中察して余り有り、というやつです。
しかしぼくはでしゃばりました。
この癖はよくないとしりつつも。
「おねえさんはおなごにござそうろう。おなごはそういうものでござそ
うろう」
「むむむ、さすればそこの稚児（ちご）よ。不二子の代わりに、拙者の
姿を目に焼きつけてくれい」
若干声を落として、【ごろざえもん】がいいました。
「ははあ、ふしょうきんのすけ、かしこまってござります」
ぼくがそういうと、【ごろざえもん】は満足そうに高笑いして、
「拙者も、もののけ、ではない、もののふ、でござる。さすれば【ごろ
ざえもん】、そちを信じて、すみやかに退散つかまつる」
「ははあ、ふしょうきんのすけ、きょうえつしごくにござりまする」

後日、懐翁に報告すると、

「隣のお姉さんは、ご先祖さまをよく見られないで残念でしたね」

「わしのごせんぞさまの、にがおえ、かいてあげたのでう。それをかべさはって、まいにちうれしそうにみとる。ふるづかいて、よかったよかったと、おねえさんはいつとるのう」

これは嘘ではありません。

いま隣のお姉さんは、ご先祖さまに捧げる詩を書いているとのこと。

詩が完成したら、【ごろざえもん】がどんなに悦ぶことか。

「金ちゃんもよかったですね」

「なにがよかったんじゃ」

「侍言葉を喋れてよかったですね」

「けんど、たいしょうのことばじゃのうて、けらいのことばじゃ」

ぼくは不満をいいました。

再会したなら、こんどは大将の言葉を使いたい。

そんなふうなことをぼやくと、懐爺は苦笑しながらこういいました。

「けれども金ちゃん、恭悦至極（きょうえつしごく）といっちゃいましたから、【ごろざえもん】は、金ちゃんを信じるのではなくって、自分が退散するのを悦ばれたとおもっているはず。残念ですがもうではきませんよ」

懐爺の予言は当たったということです。